

上原先生を送る辞

戸 口 幸 策

本日は、皆様がた、いろいろ御都合もお有りのところ、上原和教授の最終講義にこのように大勢お集まりくださいまして、芸術学科一同に代わり、厚く御礼申し上げます。

先生は今日の講義を普通の教室でしたいとおっしゃっていたのですが、生憎適当な教室が取れず、少し大袈裟なこの場所になってしまいました、申し訳無く思っております。また私どもは普段は上原さんと呼んでいるのですが、本日は公の場ですので、先生と言わせていただきます。どうかお許しく下さい。

上原和先生は一九二四年のお生まれで、九州大学法文学部哲学科を美学美術史専攻で卒業されたのち、同大学大学院特別研究生を経て宮崎大学に赴任されましたが、一九五五年、成城大学文芸学部に招かれて芸術学コースの創設に尽力され、以来今日まで四十年の長きにわたって、私どもの大学で、研究と教育に専念してこられました。

先生は大学生や院生であった頃は、主としてドイツ古典主義美学および美術様式論を専攻しておられました。成城大学にいられてからは、特に法隆寺の遺構および遺物を中心とする日本古代美術の比較様式史的研究に関心

を移され、今日に至っています。

先生は「成城文芸」に次々発表した論文を核として、一九六四年に『玉虫厨子の研究——飛鳥・白鳳美術様式史論』という大著を出版されました。この書物は出版当初、学界に大きな波紋を投げ掛けましたが、そこで展開された先生の学説は、時とともに高い評価を得られました。

先生はその後もたゆまず研究を続けられ、その蓄積と展開は、一九九一年の『玉虫厨子——飛鳥・白鳳美術様式史論』において、大きな実を結びました。因みに上原先生はこの著作によって、博士号を得ておられます。

先生はお若い頃、玉虫厨子に有る捨身飼虎の絵に感動され、これがその後の御研究の精神的な引き金になったと洩れ聞いておりますが、この辺にも先生のお人柄が偲べれます。

ここは、先生の御研究を全面的に扱う場ではないと思えますし、仮にそうであったとしても、私にはその能力が有りません。専門も異なりますので、私は先生のお仕事を十分に理解しているとは言いがたいのですが、芸術学科に籍を置く、いわば門内の小僧として、先生の数有る論文のうち、私が特に好きなものの中の、二点だけに ついて、的外れになるかもしれませんが、少しばかり話させていただきたいと思えます。

そのひとつは、法隆寺の建築に関するものです。皆様がたもよく御存じのとおり、法隆寺の建立の時期や様式をめぐっては、明治以来、中国や朝鮮の建築との関係なども踏まえていろいろ論じられてきていました。金堂の構造が建築的に大変無理が有るのはどうしてかという問題をめぐっても、語られてきていたわけですが、私の誤解でなければ、確か上原先生は、三十年以上も前に、もしそれを玉虫厨子を写そうとしたものと考えれば理解できるのではないかとという仮説を出されました。勿論それは、ただの思い付きというようなものではなくて、先学の諸説をつぶさに研究し、いろんな角度からの綿密な考証を踏まえたものではあるのですが、私は、単なる実証

の積み重ねから遙かに飛翔したこのお考えに大変共感を覚えました。このような学説は、それ以前の論争の経過を見ますと、いわば天動説を地動説に変えたようなもので、初めは摩擦も大きかったようですが、法隆寺の建立の時期や様式に関する先生のお説は、全体として、明治以来の法隆寺論争に事実上終止符を打たせることになったものと評価されていると伺っております。

上原先生はまた、日本の玉虫厨子の様式を理解するためだけでも、西はローマ、ギリシャから中近東、シルクロードを経由する、様々な事物や様式の伝播の研究を踏まえないとお考えから、この点で古代から重要であった、北半球の、研究に必要な事実上すべての地域を踏査され、問題になりうるもの的一切を、御自分の足と眼で確認するという大変な手続きを踏んで、仮説を裏付け、また、その後も引き続いて、新しい諸説を発表してこられたようにお見受けします。

その成果のひとつと考えられる論文が、一九八五年の「ガンダラの弥勒菩薩像をめぐる諸問題」です。先生はここで、弥勒菩薩が手にしている瓶は、いわゆる水瓶でなくて香油を入れたものであろうという説を出されました。これも実証に基づいたひらめきによる、私の大好きな仮説なのですが、最近中国でも高く評価されて、先生の論文は中国語に翻訳されたと伺っております。

私には、先生は、いわば理論物理学者と実験物理学者を兼ね具えている方のように思われるのです。

上原先生はまた、聖徳太子をめぐるても興味深い論を展開しておられますが、今はそれに触れる余裕がありません。

成城大学の教員としての上原先生は、相良徳三先生や浅沼圭司先生とともに芸術学科の基礎を堅める上で重要な働きをされ、また皆様よく御存じのとおり、文芸学部長、文学研究科長を歴任して、私どもの学部を整備と発

展に力を尽くされるとともに、学園の理事や評議員として、学園全体の発展のためにも大きな貢献をなさいました。

このような上原先生が去られるのは、特に芸術学科の教員として大変残念なことではありますが、これもまた人の世の常として受け容れざるを得まいと考えます。今はただ、先生が、今後ともずっと現在のような健康を保って悠々自適の生活を送られながら、学会を啓発する学説を提起し続けられるとともに、良き師として、また少し年上の輝かしい友人として末永く御交誼を賜わることが切望する次第です。

それでは上原先生の「玉虫厨子の落書き——秘められた朱蓮の蕾」と題された最終講義を御静聴ください。

(この小文は、一九九五年一月十三日の上原和先生の最終講義に際しての、芸術学科主任としての挨拶に少し手を入れたものです。)